

研究のまとめ

1 教科領域研究テーマ

生徒が他者や社会との関係性の中で、自由に表現できる授業展開とメタ認知力を高めるための評価の工夫

2 成果（○）と課題（●）

○継続して行うことで、生徒が英語を話しやすくなってきているように感じた。LC→p4cの流れにより、少人数で英語を話すステップを踏むことで、全体の間でも自分の意見を自信を持って言えるようになってきたと感じた。

○多様な意見、違った考え方にも巡り合うことができるようになり、生徒の思考の幅が広がったように感じた。生徒がお互いの意見を尊重し、話す内容・中身・題材が大切であることに意識が向いてきているように感じた。○間違っても構わないので自分の考えを話しても大丈夫という安心感が生まれた。話し手はわかってもらおうとすることが大切で、聞き手は話し手が何を言いたいかかわろうとすることが大切という雰囲気が教室内に生まれ、積極的に英語を話そうとすることに繋がったと感じた。

○ロイロノートを使うことで、教師が生徒の振り返りの状況をすぐに確認できるのは良い。

○生徒が機械に対して話すことで、英語を話すことに対するハードルが下がる。会話の様子、AI の話す英語が速い。生徒が質問したり答えたりしたことに対して、AI がつなぎ言葉を用いたり、内容を踏まえた上で生徒に質問したりしていることがすごい。

○最後の全体での振り返りの場面で、先生から「日本語でもいいよ。」と言われながらも、英語でしゃべる生徒がすばらしい。

○発表して音声入力と文字化された文章のチェックという2つの要素があった。発音をうまくする、文法を直すという点であれば、打ち込みで入力でもできると思う。

○困っている生徒が周りの生徒に頼っていて、その生徒が教えている場面がある。生徒同士助け合いの雰囲気がある。英語学習の良い学習習慣づくり・授業の仕組みづくりができていた。

○生徒たちが防災、避難について伝えたい内容を考えて、工夫して伝えていた。

○即興でのやり取りも、英語やジェスチャーを使ってなんとか伝えようと努力していた。

○英語が苦手な生徒も自分のできる範囲で準備し、発表できていた。

○初めて会うゲストティーチャーの情報を質問しながら得て、そのあとの発表の内容に繋がっていた。

●今後は、セントアンドリュース校の生徒と英語で話すなど、ネイティブの生徒と話し合う場面を今まで以上に設定することで生徒が自信を持って英語を話すことに繋がると考える。

●ロイロノートの質問項目が英語であった。解説をしていたが、日本語でも良いと感じた。

●生徒が継続して振り返りを行い、継続して記録し、can do リストと比較することで、成長を実感できるような振り返り一覧表を作ってみるのが良いように感じた。

●授業の実際が、指導案に沿った内容だったか検討する必要がある。

●以前メタ認知を高めるためにOPPシートを利用など、メタ認知を高める方法を研究すべきである。

●ねらいの「分かりやすく説明する…」の「分かりやすく」とはどうやって評価するのかを評価基準を明確にすべきだった。

●詳しい説明をシンプルなワードでできればよいが、語彙力の不足のためできていなかった。

●ゲストティーチャー等外部の方々や授業を行うときには、計画的にかつ事前打ち合わせ等十分に行ってからしないといけない。

3 次年度に向けて

○次年度は本研究3年目となるので、評価基準やメタ認知力の高まりを確認できるワークシート、デジタルでの評価方法の工夫が必要であると考えている。

○生徒が姉妹校などの他者や地域社会との関係性の中で、自由に表現できる語彙力・表現力を高める授業展開を工夫していきたい。